法然上人事典

五十九歳、義山は講述にあたり『翼賛』を座右においていたことは、随所に「註の如し」「委は註を見合すべし」とあることによってうかがわれ、『翼賛』と『随聞記』を見ることにより義山の調査と研究動向が知られる。

円光大師御法語集　えんこうだいしごほうごしゅう

山僻地の人であっても、容易に宗祖法然上人の伝記に接し、法語を見ることができるようにという意図のもとに、館林善導寺前住満成が纂輯し、東京伝通院中教院福田行誡が序を添え、明治十年（一八七七）七月に東京芝宝松院から出版されたもので、乾坤の二冊から成っている。

上巻（乾）は『浄土宗略抄』から上人の和歌十七首まで十九項、下巻（坤）は『小消息』から『一枚起請文』まで四十五項が収められ、僧侶が法語のおり讃題に用いることのできるようにとの配慮がなされている。

編者満成は天蓮社一誉と号し、慶応三年（一八六七）二月、館林善導寺に住し、明治十年の頃には

るが、詳伝は知

円光大師御遺跡

だいしごゆいせ

いき

内題に「浄十

跡巡拝行程案内

城南極楽橋下欅

澤。発願者は雲

教寺前住」の癖

恵闇（えげん）と、伊勢国

大阪西光寺の法

年（一七六六）

撰述したのは雲

七六二）四月上

たろう。ちなみに　法然上人に慧成大師の諡号が桃園天皇から加諡されたのは、五百五十年遠忌にあたる宝暦十一年であった。

当時、弘法大師の四国八十八カ所の遍路や西国三十三カ所の観音霊場めぐり、親鸞聖人の二十四輩の巡拝など、宗祖の行跡を慕い、山を越え谷を渡るなどの艱難辛苦の末、巡拝することが行われていた。しかし、

『円光大師御遺跡廿五箇所案内記』

翌年四月根本中堂で、天台宗としては初めて大乗菩薩戒羯磨（かつま）を行い、天長五年（八二八）、座主義真が南都戒壇に倣い、独自に戒壇院を設け、以来天台宗の僧侶はここで受戒することになった。

法然上人は久安三年（一一四七）、「十一月八日、華髪をそり法衣を着し、戒壇院にて大乗戒をうけ」た（『法然上人行状絵図』第三）。➡大乗戒（だいじょうかい）

戒脈　かいみゃく

円頓戒（えんどんかい）では梵網相承（蓮華台上相承）と法華相承（霊山直授相承）との二種の相承を立て、梵網相承は蓮華台上盧舎那仏から釈尊・弥勒を経、二十余菩薩相承ののち、羅什・南岳慧思・天台智顗・章安・智威・慧威・玄朗・湛然・道邃・最澄と次第するものであり、法華相承は釈尊よりただちに南岳慧思に相伝し、以後、智顗・章安・智威・慧威・玄朗・湛然・道邃・最澄へと相承するもので、最澄からのちは円仁・長意・慈念・慈忍・源心・禅仁・良忍・叡空・源空と次第するのが慈覚大師正流である。法然上人が臨終のおり「慈覚大師の九条の袈裟をかけ」たのは、上人が正流を汲んだ人師であることを示唆しているのであろう（『法然上人行状絵図』第三十七）。

戒譜について、法然上人は『浄土初学抄』に大乗律宗を叙するにあたって、所依の経論をつらねたのち「天台円教菩薩戒相承師資血脈譜　一首」を挙げている。この「血脈譜」には、

蓮華台蔵世界赫奕（赫）天光師子座盧舎那仏—逸多菩薩—天竺鳩摩羅什三蔵—霊山聴衆南岳恵（慧）思大師—霊山聴衆天台智者大師—章安灌頂大師—縉雲智威大師—東陽恵（慧）威大師—左渓玄朗

渓湛然大師—瑯琊道邃大師—

叡山前入唐受菩薩戒沙門㝡澄—

薩戒沙門義真〈義真も道邃大師

なり〉

とあり、京都知恩院に享禄年間（

〜三二）に用いられたと見なされ

の板木が所蔵され、この戒脈譜に

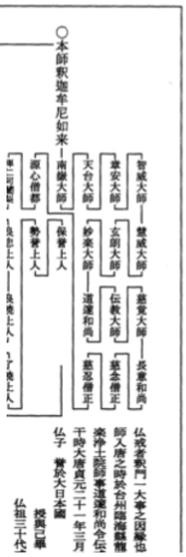
ように記されている。ここに記さ

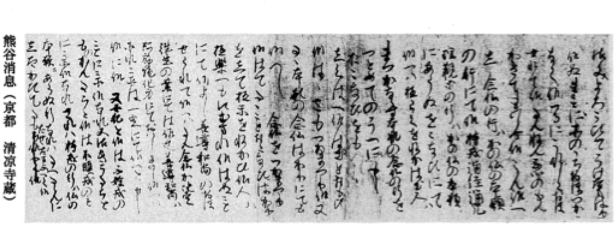
伝燈師保誉は、諱を源派と称し、

より相承、大永七年（一五二七

に晋山し、享禄のはじめ辞山、

享禄年間に知恩





熊谷消息（京都　清涼寺蔵）

谷蓮生直

第十四）

びに迎接　　信心成るべき事」（原漢文）

とあるので、このほかにも、直実の手許には多くの書状があったと思われる。

消息の類は相手に差出されたものであるから、著書とは異なり、「控」のないかぎり、手許にのこることはない。しかし、法然上人

保存し、

書状が

たちの

められ

上人（

であろ

実・津

れてい

熊谷直

うどう

武蔵国

生まれ、

ったが、

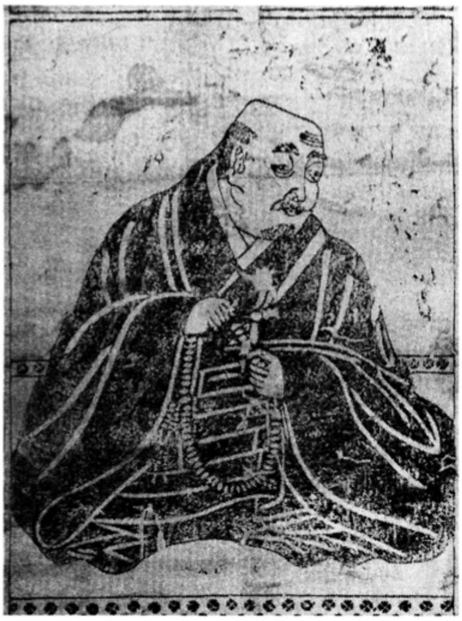
の直実

奔し、髻を切り伊豆国走湯山に逐電、その後上京し、建久四、五年には法然上人の門に入ったことは元久元年（一二〇四）の直実の置文によって知られる。

直実は治承四年（一一八〇）八月二十三

られた原木とは考えられず、後世の復刻であると私は思う。しかし、この画像は小さくまとまったもので、上人画像を研究する上に貴重な作品であることは忘れてはならない」といっている（「法然上人像について」『浄土学』二八）。

永享十二年版には「我本因地以念仏心入無生忍今於此界　摂念仏人帰於浄土　永享十二七月　日」の刻記を有し、版木は金勝阿弥陀寺に現存している。版木は表に善導大師、裏に法然上人の像を刻出しており、この版木について藤堂祐範氏は「善導大師の像は法然上人像よりは時代の早いもので、南北朝か、少くともこの期の初頭のものと思う。いま版木を実測するに縦三尺三寸（九九・九九㎝）、横一尺二寸（三六・三六㎝）である。これに反して善導大師像は上下左右ともピッタリこの版木に適応しているのに、法然上人の像は上下に余程の空間があり、また左右はあまりにせせこましく彫刻されている。これらの点を考えると先づ大師の像を彫刻してのち、ある年数をへてから上人の像を刻出したと考えさせられる。なお、この法然上人像は新らしき感じがあるから、あるいはのちの覆刻かも知れない」、法然上人像は「正和の御影を粉本として刻出したものらしく、全く同一の構図である。賛文は上人流刑の際、讃岐塩飽島にて自像に賛せられた偈である。永享十二年はこの御影を刻出したときの年号と想像する」と述べている（『浄土教版の研究』）。



版圖　法然上人御影（京都　知恩院蔵）

法然上人〈略年譜〉

1187	文治3	丁未			55		3月、栄西、再び入宋する この年、重源、周防国に阿弥陀寺を建てる
1188	文治4	戊申			56	5月15日、東山瀧山寺で不断念仏を始める	2月20日、九条良通歿する
1189	文治5	己酉			57	8月1日、九条兼実と法文語および往生業を語る 8月8日、九条兼実に授戒する	7月20日、上西門院統子歿する 12月14日、延暦寺の衆徒、天台座主全玄を逐う。院宣を下し、これを復す
1190	建久元（4・11）	庚戌			58	2月、重源の請により東大寺で「浄土三部経」を講じる 7月23日、九条兼実に授戒する 秋、清水寺の説戒にのぞみ、念仏を勧める この年、證空、法然上人の門に入る	3月4日、公顕を天台座主に補す 3月7日、顕真を天台座主に補す 10月19日、東大寺上棟、後白河法皇行幸
1191	建久2	辛亥		（関）兼実（12・17）	59	3月13日、重源の十問に答える 7月28日、九条兼実に授戒する 8月21日、九条兼実に授戒する 9月29日、中宮任子（宜秋門院）に授戒する 10月6日、九条兼実に授戒する	4月26日、延暦寺衆徒、日吉・祇園・北野等三社の神輿を奉じて、佐々木定綱らを訴える 7月、栄西、宋より帰朝する
1192	建久3	壬子			60	8月8日、九条兼実に授戒する 秋、八坂引導寺で初めて六時礼讃を修する	9月27日、重源、播磨国に浄土寺を建てる 11月29日、慈円を天台座主に補す